池田報道

市民記者が行く！

市民が池田市の魅力をリポートする“市民記者”として、地元・池田の情報を発信します。

今月の市民記者
海嶋 達也さん

1957年生まれの現在65歳。広告代理店でテレビCMやポスター・パンフレットなどの制作ディレクターを経験してきた実績を生かし、今年から市民記者に。美術や音楽、イベント参加などの趣味を礎に、池田の現在を紹介します。

取材先

作曲家・編曲家・音楽プロデューサー　長谷川智樹さん

最近では、浪速のショパンと呼ばれています

音楽の表舞台にはあまり登場しないが、その世界で重要な役割を果たしているのが作詞家や作曲家、音楽プロデューサー、マネジャーなどいろいろなスタッフです。今回は東京でその作曲・編曲・プロデュースなどの仕事をされ、現在はふるさとの池田市に住む長谷川智樹さんを訪ねました。

旭丘の音楽バーにて

音楽中心の生活は池田から

音楽好きの両親の影響で5歳からバイオリンを始めた長谷川さん。その後、妹が使っていたピアノを弾くことになり、音楽中心の生活がスタートします。中学生のときにビートルズのアニメーション映画「イエロー・サブマリン」に出会い、アニメーション映画音楽の編曲にオーケストラが使われていることに衝撃を受け、作曲・編曲の新たな魅力に惹かれていきます。さらに自分自身がリーディングするバンドを高校生から始め、キーボードとギターを担当。そして、このバンド活動は京都・大阪・神戸と活動の範囲を広げていきました。

音楽家としての転機と活躍

1984年3月、26歳のときに東京に進出。そこから、作曲家・編曲家・音楽プロデューサー・キーボードプレイヤー・ギタリストとして、映画・テレビ・CMソングなど多岐にわたる活躍を果たし、さまざまなアーティストと実験的な音楽制作も進めていきました。甲斐バンドや西城秀樹、スピッツなどと共演し、映画やテレビでも「いつかギラギラする日」「ためしてガッテン」などを担当しました。

プロの音楽家として思うこと

「音楽に触れ始めた幼い頃から、自分を前面に売り出すのではなく、人のための音楽、誰かのための音楽作りをしたいと思ってきました。それは今でも変わりません」と長谷川さん。取材をしていてもその姿勢と思いは、はじめからプロを志していたことに気付かされます。また、オーケストラを使ったアレンジを大切にしているところがショパンと重なることから「浪速のショパン」と呼ばれています。60歳を過ぎて池田に戻ってきたいま、全国的な音楽活動もしつつ、一方では「最近、若手が運営する、こだわりのカフェが池田でも見られるようになってきた」と、音楽と関係なく池田の若手の活躍を楽しみにする長谷川さんでもあります。

お問い合わせ

連絡先　㈲ベリーグー

詳細は同社ホームページをご覧ください。